

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

卒業

平成28年3月第2週放送

卒業の季節です。

「たくさんの 希望と夢を抱きつつ ^{はね}羽根はばたかせ今 飛び立とう」
新潟の中学生が、卒業を詠った短歌です。

とても素直でまっすぐな歌ですね。希望と夢に胸をふくらませ、新たな一步を踏み出す喜びを「羽根はばたかせ今飛び立とう」という言葉でのびのびと歌っています。前へ向かって歩を進める「^{しんぽ}進歩」の歌とっていいでしょう。

しかし、「進歩」といっても、歩む方向はしっかりと定めなくてははいけません。そのためには一度立ち止まる必要があります。

「東京の ^{ざつとう}雑踏の中で立ち止まり わが行く道を ^{もさく}模索しており」

この短歌は、同じ新潟の中学生が、修学旅行で東京を訪れた際に詠った短歌ですが、卒業を前にして一度立ち止まり、将来の道を探しているという読み方もできるでしょう。

新しい道を探るためには、一度立ち止まらなければならないのです。

「進歩」という言葉の対義語に、一般には^{たいか}退化するといった意味合いで使われる「^{たいほ}退歩」という言葉がありますが、仏教では違う使い方をします。

立ち止まって自分を^{かえり}省み、おのれの本質に立ち返ることをいいます。

「^{たいほ}退歩」は、立ち止まる大切さを伝えている言葉なのです。

「いつの日も 思い出すのは^{なつ}懐かしい あの夕暮れの 暗いグラウンド」
埼玉の高校生が、卒業を前にして詠った短歌です。

作者は、卒業を前に立ち止まり、自分の本質を探ったのだと思います。そして探り当てたのが、「夕暮れの 暗いグラウンド」だったのです。その^{じょうけい}情景に象徴されたものが自分の本質と感じ、「いつの日も 思い出す」、つまりいつもそこに立ち返っていくからこそ、これからの日々を一生懸命歩いてゆくことができる、そのような読み方ができるのではないかと思います。

卒業は、旅立ちの時であると同時に、立ち止まる時であり「^{たいほ}退歩」を学ぶ時なのではないでしょうか？

立ち止まり、自分の本質に立ち返った時、私たちは、より確かな、新しい一步を踏み出すことができるのです。

— 終 —